

戦前期における大学史・高等教育史の再検証 —東アジアという視点から—

報告

(1) 「帝国の医師養成」

永島 広紀 (九州大学韓国研究センター教授)

(2) 「在朝日本人実業家二世・三世の内地留学」

木村 健二 (下関市立大学名誉教授)

(3) 「在外日本人教育と日本政府—在外指定学校制を通じて—」

福島 寛之 (福岡大学人文学部准教授)

コメンテーター 山田 浩之 (広島大学大学院教育学研究科教授)

山口 輝臣 (東京大学大学院総合文化研究科准教授)

日時 令和2 (2020) 年3月16日 (月) 14:00~

開 場 13:30~

開 会 14:00~

個別報告 14:05~15:50

討 論 16:00~16:50

情報交換会 17:30~

会 場 広島大学東広島キャンパス 教育学研究科第二会議室 (管理棟2階)

※詳細は裏面の地図をご参照ください。入場料無料、要事前申し込み

【参加申し込み・問い合わせ先】

広島大学文書館

Eメール bunsyokan@office.hiroshima-u.ac.jp 電話 082-424-6050

企画趣旨

従来の教育史研究では、内地、外地という区分に見られるように現在の日本国の国境線を暗黙の前提としているものが少なくない。このため朝鮮出身者、台湾出身者といった外地から内地への「留学生」のみが強調される結果となっている。しかし近年になって「帝国日本」という分析枠組みが提示され、台湾、朝鮮、南洋諸島、満州、あるいはハワイやブラジルと言った移民先なども含めた領域内での人材や知識、あるいは資本や物資の交流が見直されつつある。

こうした点を踏まえるのであれば、外地→内地といった「留学」だけではなく、内地→外地の「留学」や外地→外地といった「留学」にも目を向ける必要がある。また、親世代の移住も視野に入れるのであれば、内地→外地→内地 (外地に寄留する日本人子弟の内地進学) や外地→内地→外地 (日本に寄留する移民の子弟の外地進学) といった多様な人の動きも視野に入れる必要が考えられる。

そこで本研究集会では、これまでの旧制中学研究や旧制高校研究に見られるような学校史の枠組みを超え、あらたに「学歴/学校歴」から照射される「帝国日本」の「知」の制度的運用をめぐる悉皆的研究を行う手がかりや視点を考えてみたい。

